

# 第二外国語教育の位置づけと効果的教授法

桑本裕二

## The Status and Effective Teaching of Non-English Foreign Language

Yuji KUWAMOTO

(平成20年11月28日受理)

This paper shows some of my ideas for teaching of non-English foreign language at Akita National College of Technology. At our college, there is a subject of "German I" as a second foreign language. German, or another non-English language, currently is considered to be ineffective for higher education as a whole. Aside from such situation, I suggest that non-English language teaching be quite important in higher education.

I have been teaching German (as a second foreign language) at our college since fall 2007. In classes of German I have radically changed the way of teaching from that before spring 2007. I have used a standard grammar textbook, and tried teaching whole volume of the book.

The most valuable point in learning German is that students could apply knowledge of non-English language for their English learning. Since there are quite many lexical, phonetic, or other grammatical similarities between German and English, students could treat some phenomena in German parallel with those of English, and thus facilitate their skills of English with learning German.

### 1. はじめに

高専も含めて大学・短大等の高等教育機関において、語学教育はその教育体系全体の中で主要な役割を持っているとっていい。特に英語の教育は、どのような分野の学問領域においてもほとんど必要不可欠のものと位置づけられ、その運用能力の養成はどのような形態の高等教育機関であれ、その改善、向上が求められ、担当教員の責務となっている。

一方、英語以外の外国語（通常、英語を主要な外国語として「第一外国語」と呼ぶのに対し、「第二外国語」とよばれる）に関しては、特に近年その必要性が薄れ、「二つ目の外国語」の教授・教育について真剣に論じられたり引き合いに出されたりする機会はきわめて乏しくなっているようにみうけられる。このような風潮のなかで、第二外国語無用論のような意見を聞くこともしばしばある。

筆者は2007年度後期より秋田高専人文科学系ドイツ語担当となり、以来第二外国語としてのドイツ語の教育に携わってきた。筆者は、上述のような昨今の風潮に反し、第二外国語の教育はきわめて重要な位置づけをするに値することを強調したい。

秋田高専のような、学ぶ学生がドイツ語やドイツ文学、ドイツ文化などを専門とせず、必ずしも語学や外国文化に興味を持たない学校では、教員側がこれを意味ある科目と認識し、また、学生側に必修科目としてこの科目に真剣に取り組むものと自覚させるのは非常に難しい。ややもすると、教員、学生ともに「いいかげんでよい」という意識を生じさせてしまい、その行き着く先として「科目として不必要、無用」という烙印を押されかねない。

筆者は、ドイツ語担当になってから新年度にあたる2008年度よりそれまでの教授法を見直し、使用教科書や教える内容、範囲なども抜本的に見直した。

本稿は、ドイツ語教育に関する、秋田高専全体の教育方針に対する位置づけとそれへ向けての指針、担当授業での実践を通して期待される効果について考察したものである。

### 2. 第二外国語教育に関する高専教育での位置づけについての私論

第二外国語としてのドイツ語教育の、高専教育のなかでの位置づけについて考えてみる。

まず第一に前提とすべきことは、ドイツ語は秋田高専においては必修科目となっていることである。必修科目であるということは、それだけの重要性をもってカリキュラム上に設置されているということであるから、それなりの意味づけをもたせて教育に当たらなければならないということになる。それでは、そのような意味づけとはどうあるべきなのか？

秋田高専にかぎらず、高等教育機関での語学教育としては、まずはなにをさしおいても英語の教育は必要不可欠のものであり、その実用能力の養成に関しては、方法論や程度に差があるとはいえ、おそらくどのような高等教育機関でも教授法の研究や実践面の改善の模索などが積極的に行われている現状にある。その一方で、第二外国語教育（通常は英語以外）は、当該言語を対象とした言語学や、その言語の地域の文化、文学の研究を前提とするのでなければ、その実用的言語運用力の養成は必ずしも達成されるべき目標であるとは言い難いものである。そして、秋田高専は、工業分野の学術教授、研究が主要な営みであるので、第二外国語の養成が重要な目標とならないことはこの典型にもれない。つまり、秋田高専における第二外国語であるドイツ語が必修科目でありながら、かりにある学生が、履修したドイツ語の知識を全く身につけないで（または単位を取得する瞬間だけ記憶しその後全て忘れて）卒業し、上級学校へ進学、または専門知識を生かした就職先へ就職したとしても、そのために彼（彼女）がどうしようもなく困る、という可能性はほとんど考えられないのである。

このように、秋田高専においては、第二外国語のドイツ語は必修科目でありながら実用的運用力はほとんど必要とされていないという矛盾をかかえ、なおかつその教科の存在意義を模索しなければならないという困難な問題点をもっている。筆者は、このような問題点に対し、ドイツ語教授に対して、実用面を主要な目標とせず、言語としての本質を強調するかたちでとらえることを考えた。具体的にいえば、ドイツ語を、実用に耐えうるように単語や表現、文法事項、活用を暗記し使いこなすということをもった目標とせず、そのかわりに英語との対照を際立たせた文法事項の説明により、全体的な言語観をおぼろげながらも理解できるということを目指すということである。全体として言語観を理解させるためには、なにも単語を、その文法性（gender）や複数形（plurality）、動詞の不規則活用形なども含めていつでもとっさに表現できるように暗記することは必要ではない。「だいたいこんなもの」という

認識のもとで、見慣れない、あるいは一度は習ったが忘れてしまった単語は辞書により、そして自分にとって記憶がおぼろな、あるいは難解な語形変化や文法事項は文法書（この場合は使用教科書）によって確認できれば十分である。筆者はそのような達成度、理解度によって、ドイツ語教育を位置づけることとした。

こういった緩やかな文法認識がどのようなことに役立つのかというと、英語学習へのサポートになる、あるいはなつてほしいということであり、筆者はこれにもとづいて、ドイツ語教育の究極的かつ希望的目標として、「ドイツ語を教えることが、英語の語学力を向上させるための一助となること」を想定した。

自国以外の他言語（外国語）や他文化（外国文化）の理解や習得のためには、まずは、自国の言語（母語）や文化を正しく知り、それらを双方向的に分析することが極めて有効なこととなる<sup>1</sup>。英語教育の現場でも当然この点は考慮されるべきであり、筆者も英語教育の現場では十分に念頭に置いて実践してきた<sup>2</sup>。

学生は、外国語学習の対象としての英語に対して、母語である日本語（留学生を除く）とのあまりの差異に愕然とし、あるいは文法事項が日本語とあまりに無関係に思え、英語に対する拒絶感を抱いてしまいがちである。このような、母語と外国語を二局的または二律背反的にとらえてしまいがち、あるいは教師側が無意識にそうしむけてしまっている状況下で、第二外国語（ドイツ語）は第3の言語としてその間に入ってくることになる。二つめの外国語を学ぶことは、詰め込み式の暗記中心で、他との関連を断ち切った形での孤立的かつ無機質な言語教授法では、学習者は一つ目の外国語である英語に対しても、かえって混乱を来たし、第二外国語の学習は不都合にしか機能しなくなる。しかし、第二外国語の知識は、教師側の工夫次第では、第1の外国語（英語）に働きかけ、第2の外国語の知識を知らないよりは効果的に英語に対する親近感を増し、語学的な理解度を高めることにつながられるものと期待できる。加えて、ドイツ語は、英語と同じインドヨーロッパ

<sup>1</sup> 桑本・宮本（2005）は、秋田大学での留学生教育において、留学生の母国文化と日本文化を双方向的に対照させる異文化理解の授業実践（日本事情）を報告している。

<sup>2</sup> 筆者はドイツ語を担当する。2007年度前期までは秋田高専では英語の専任教師であった。2007年度後期よりドイツ語の専任教師となり、主にドイツ語の授業科目を担当するようになったが、それ以後も英語科目を担当している。

語族ゲルマン語派に属し、系統的に同一であって、類似の文法項目、語彙、音韻が多く存在する。それらの類似性を強調することによって英語に関する理解度を再強化することにつながれると考えている。

さらに、英語、ドイツ語両言語の類似点・共通点とならんで、相違点に注目することもまた重要である。異なる文法事項や語彙の差異は、英語のみを特異なものを見なす固定観念を和らげることにつながる。

以上のように、筆者は、秋田高専（また幅広く当該地域に関わる学問以外の教育・研究機関）においては、第二外国語の教育を、綿密で詳細でないかわりに体系的に整然とさせ、また、日本語や英語との対照に重点をおくものにとらえた。そして第二外国語を特に第一外国語としての英語に働きかけることによって、それが英語の運用能力の養成に対する一助となるということが十分に期待できるものとする。第二外国語としてのドイツ語のあり方を模式的に示すと図1のようになる。

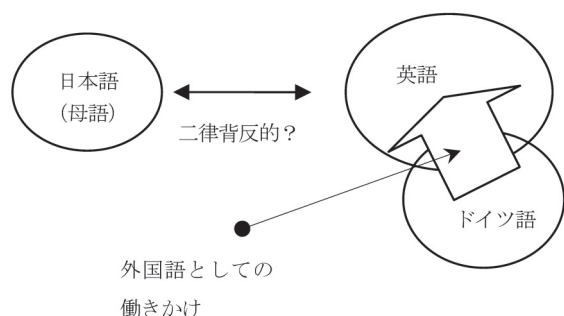


図1

### 3. ドイツ語の教授法について一どこまでをどのように教えるか

本節では、前節の考察の通りにドイツ語教育に関しての指針を定めた上で、どのような内容をどのような方法で教えるのかということ論じる。

秋田高専における、ドイツ語科目のカリキュラム上での設置状況は次の通りである。比較のため、英語の各学年ごとの科目設置状況（必修・選択の別を明記）も示す。

必修科目の「独語Ⅰ」は、英語科目の分布と比較すると、高校卒業程度の英語科目を一通り終えて（高専1～3年次）4年次で初めて習うことになるが、この点は、大学等で、1年次に第二外国語を

表1 ドイツ語科目の学年ごとの分布（単位数）

	独語Ⅰ（必修）	独語Ⅱ（選択）	計
1年			0
2年			0
3年			0
4年	2		2
5年		1	1

表2 英語科目の学年ごとの分布（単位数）

	英語 <sup>3</sup> （必修）	LL演習（必修）	英語会話（必修）	選択科目	計
1年	4	2			6
2年	4		2		6
3年	4				4
4年	2				2
5年	2			1×2 <sup>4</sup>	2+1

履修し始めることと同等である。ただし、通常の大学などでは、外国語科目は第二外国語でも2カ年にわたって4～8単位の履修が標準となっているから、表1で示されるドイツ語の単位数（必修2単位）はそれに比べて非常に少ない。秋田高専において第二外国語にふれるのは、選択科目の「独語Ⅱ」を含めても、1年半、3単位にすぎないという現状である。

筆者は、このような時間的制約のなかにあっても、受講学生に対して「独語Ⅰ」（必修）で、一通りのドイツ語の基礎を学習させるべきであると考えた。このためには、重要な文法項目を割愛していない、標準的な内容の初等文法の教科書を用い、それを網羅的に学習させる必要がある。

後述するとおり、筆者が担当する以前の「独語Ⅰ」で学習するのは、形容詞変化、比較、受動などを含む重要な文法項目が付録にまわされている、最初歩的な教科書を用い、しかも6課構成のうちの4課で1年の授業内容が終了するというものであった（後述表3参照）。筆者が推察するかぎり、必要最小限の文法項目のうち約3分の1といった程度である。筆者は、このような現状を改め、標準的な初等文法の教科書を使用し、それをほぼ網羅する学習で1年の授業を展開しようと考えた（使用教科書の

<sup>3</sup>「英語」は平成17年度入学者までに対応する科目の名称。平成18年度以降入学者に対しては、「英語Ⅰ」（1年次）「英語Ⅱ」（2年次）「英語Ⅲ」（3年次）「総合英語Ⅰ」（4年次）「総合英語Ⅱ」（5年次）と名称変更している。

<sup>4</sup>平成20年度現在、「現代英語演習」「科学英語」の2科目がある。平成21年度以降は「上級英語」1科目のみの開講となる。



具体的な内容、授業の進め方に関しては後述)。

本来であれば、このような教科書を授業で使用すれば、期待される、または要求されることは、「辞書と文法書(使用した初等文法の教科書)があれば、初歩的な内容の文章が理解できる」ということであろう。しかし、表1の通り、必修で通年2時間、2単位だけの学習量であり、時間的に上述の程度の内容が達成されることは期待できない。加えて、ドイツ語の語学力は、秋田高専の学習到達目標としてはおそらく要求されていないということもある。実用的なドイツ語運用能力は、英語のそれに比して重要度、要求度ともに格段に落ちるといわざるをえない。

このような状況の下で、どの程度の内容を目指すのかということを確認にしなければならない。先にもふれたように、秋田高専のカリキュラムのなかでは、ドイツ語に関して何も実用的な運用能力が期待されているわけではない。したがって通常の一般教養科目の語学として期待されるレベルの語学力は必ずしも必要ないということになる。文法項目や単語、様々な活用形をしっかりと暗記し、それらを自由に使いこなせるだけの学習量や学習内容を実行することは全く必要ないということを確認すべきである。第一、そのような学習を行ったとしても、ドイツ語学、ドイツ文学などを志す学生ではない以上、なかなか知識を身につけさせることはできないし、かりにテストなどのために活用や単語を丸暗記したとしても、すぐに忘れてしまうだろう。だとすれば、せっかくの授業の内容が、達成目標からすると全く無意味であることになってしまう。

以上を考慮し、筆者は、丸暗記などの負荷を学生に与えることなく、網羅的な文法項目の教授を目指すため、授業内容を、文法項目のエッセンスの説明と、簡単な問題演習の実践にとどめることとした。そうすれば、こまかい文法項目をきちんと記憶することがなくても、ドイツ語の全体像について「だいたいこんなもの」という認識を持つことができる。極論すれば、ドイツ語の単語を綴りの通りに発音できるだけでも1年間ドイツ語を習った価値はあると見なしていいと思う<sup>5</sup>。また、文法性(gender)の存在や体系的な名詞類の格変化などに関しても、「そんなものがドイツ語にある」という認識、または少なくとも「感想」という程度の知覚であっても、秋

<sup>5</sup> 筆者が英語専任の時、ドイツ語を履修し終わったはずの学生(専攻科学生も含む)が、簡単な文法項目はおろか、ドイツ語の単語(英語のテキストに出てくるドイツの人名や地名など)の正確な発音が出来ない(ほぼ例外なし!)ことに愕然としていた。

田高専の学生に対しては十分な達成度であると考えられる。

#### 4. 使用教科書の選定について

本節では、筆者がどのような点に着目して新たな教科書選定を行ったかについて述べる。筆者がドイツ語担当を引き継いだ2007年度まで使用されていたテキストは、『Tschüs, bis morgen! neu』(山本淳著、同学社、1998年初版、2006年三訂初版、B5判、100ページ)である。教科書全体の内容を列挙すると次の通りとなる(シラバスに従った定期試験の時期を挿入。表4についても同様)

表3 『Tschüs, bis morgen! neu』の内容

課	内容
イントロ	綴りと発音
Lektion 1	・あいさつ ・動詞の現在活用(規則動詞. sein, haben)
前期中間試験	
Lektion 2	・冠詞と名詞の性、数、格変化 ・人称代名詞
前期末試験	
Lektion 3	・定冠詞類・不定冠詞類 ・II 格の用法 ・否定文 nicht と kein
後期中間試験	
Lektion 4	・不規則動詞の現在変化 ・前置詞 ・曜日と月
学年末試験	
Lektion 5	・分離動詞/非分離動詞 ・助動詞 ・接続詞
Lektion 6	・命令文 ・過去形・完了形
付録 <sup>6</sup>	・形容詞格変化・比較・zu不定詞句・関係代名詞・再起動詞・受動・接続法

この教科書は、設定されているLektion(課)の数や付録にまわされている文法項目の重要度などから考えて、標準的な一般教養科目としての語学用教科書としては最も平易な部類に属するものと考えられる。そして、2007年度の秋田高専の授業計画(シラバス)によると、通年2時間(2単位)の科目で、Lektion 4までの学習内容となっている(表中二重線まで。「内容」の太字部分)。この教科書使用およ

<sup>6</sup> 「ステップアップ文法項目」として上記7項目が10数ページにわたってまとめられている。

び教授内容では、例えば、助動詞の表現、過去形、形容詞の活用など、初歩的な文法項目が教授されないことになり、少なくとも必修で設定された科目として十分な、または最低限の内容を踏襲しているとはとても言えない。

筆者は旧来の使用教科書、およびその進度、活用法などを見直し、年度当初からドイツ語専任となる2008年度から使用教科書を適切なものに変更し、それに基づいて教授法も改変することとした。

筆者が2008年度より使用し始めた教科書は、『Lecker! Lecker! Lecker! おいしく学ぶドイツ語』（春日正男・松澤淳著、郁文堂、2007年初版、B5判、111ページ）である。教科書の内容は以下の通りである。

表4 『Lecker! Lecker! Lecker! おいしく学ぶドイツ語』の内容

課	
イントロ	・文字と発音・あいさつ・曜日と月
Lektion 1	・動詞の現在活用
Lektion 2	・冠詞と名詞の性、数、格変化
Lektion 3	・不規則動詞の現在変化 ・命令形
前期中間試験	
Lektion 4	・定冠詞類・不定冠詞類 ・指示代名詞
Lektion 5	・人称代名詞 ・前置詞
Lektion 6	・助動詞 ・未来形
前期末試験	
Lektion 7	・分離動詞 ・再起動詞 ・従属接続詞と語順
Lektion 8	・形容詞の活用 ・形容詞の名詞化
Lektion 9	・動詞の過去／過去分詞 ・過去形
後期中間試験	
Lektion 10	・完了形
Lektion 11	・形容詞の比較 ・zu不定詞
Lektion 12	・関係代名詞
学年末試験	
Lektion 13	・受動 ・現在分詞
Lektion 14	・接続法Ⅰ ・接続法Ⅱ

この教科書は、課の数は14である。多くの初学者向け学習用教科書の課の数は10～15程度であるから、規範的な課の数である。また、文法項目も、付録にまわされたりしていない正規の課で受動やzu不定詞、接続法まで盛り込まれている。筆者は、一般教養の初級向け語学の科目は、当該外国語の文法を一通り終え、辞書と文法書があればどうにか原書を訳読できるという能力が本来望まれるものであると考えるが、この点において、この教科書はその理念を踏襲できる標準的教科書であると考えられる（ただし、本授業実践においてはその理念上の到達度はそもそも望まれていないことは明記しなければならない）。授業の進度は次節で述べるとおりだが、年4度の定期試験（前期中間、前期末、後期中間、学年末（後期末））ごとに3課ずつ行い、通年でLektion 12までの学習を終了することとした（表中二重線まで、「内容」の太字部分）。

## 5. 実践—シラバスに基づく授業の進め方

2008年度の「独語Ⅰ」の授業の進め方は、シラバスの記述に従うと、以下の通りとなる。

### <前期>

授業ガイダンス	1回
文字と発音・あいさつなど	1回
Lektion 1	1.5回
Lektion 2	1.5回
Lektion 3	2回
（前期中間試験）	
テスト返却・解説	1回
Lektion 4	2回
Lektion 5	2回
Lektion 6	2回
（前期末試験）	
テスト返却・解説	1回
前期計	15回

### <後期>

Lektion 7	2回
Lektion 8	2回
Lektion 9	2回
これまでのまとめ	1回
（後期中間試験）	
テスト返却・解説	1回
Lektion 10	2回
Lektion 11	2回

Lektion 12 (学年末試験)	2回
テスト返却・解説	1回
後期計	15回
通年計	30回

内容はまだ実践されていない。

## 6. ドイツ語以外の外国語教育の可能性

秋田高専における第二外国語はドイツ語のみであり、これまでこの前提のもとに第二外国語教育のあり方について論じてきたが、第二外国語として他の言語の可能性について述べておく。

そもそもドイツ語が第二外国語として確立した背景には、第二次世界大戦前からの教養主義の伝統と、日本に、西洋に基盤をおく学問の教育が導入された数十年～100年前の社会的事情から、英語とならんでドイツ語の重要度が現在とは比べものにならないほど高かったという事実に基づいているようだ。現在の世界の趨勢のなかで、人口的にも地域的にもっとも世界的に流用されている言語は英語だろうが、ドイツ語がこれに次ぐ地位であるとはとても言い難い。学問的にも、ドイツ語でなければ読むことのできない重要な文献なども、数十年前に比べるとその需要は極端に少ないといわざるをえない。

ドイツ語以外の外国語の学習の必要性を考えるに、地域的に幅広く通用する言語として、北部・西部アフリカで有力なフランス語や、中南米の大部分の地域の公用語であるスペイン語などがあり、これらの言語は世界標準という意味では英語に準じる地位を持っているといえる。これらの言語を、将来第二外国語として採用することを考えてもいいのではないだろうか。また、学生に対して国際的な視野を養うという実現のためには、いきなり世界標準を土台にするのではなく、近隣諸国・諸地域に目を向けるべきであると思うが、この視点に立てば、韓国語、ロシア語、中国語などは、運用能力がつけばなおのことよいが、少なくとも言語に関する知識があってもいいのではないかと思う。2008年度の秋田高専4年次学生を対象に行われた工場見学の行事は1学科のみ韓国への旅程が組まれたようであるが、このような昨今の状況に見合うためにも近隣の諸国の言語の知識はむしろ必要なのではないかと思う。

さらに、東南アジアからの留学生の多くは出身国の諸事情からドイツ語にはほとんどなじみがなく、カンボジア、ラオスなど、フランス語が国内で幅広く流用されているような国からの留学生も毎年のように在籍している。留学生の出身国の言語事情なども考慮するならば第二外国語としてドイツ語以外の言語も選択できるようにすべきであると思う。

留学生教育の面から、第二外国語に関してみると、

Lektion 3 以降、各Lektionごとに2回分の授業を当てている。これは、1回目で約3ページ分の文法内容の説明を行い、2回目の授業で各Lektionごとの練習問題を演習、解説する、というものである(Lektion 1, 2は内容が容易なので進度は以降の課に比べて速めである)。授業で扱うべき文法項目が前年以前に比べて格段に増えているが、その分、学生の学習に対する負担を軽減するため、丸暗記などを強要せず、各文法項目の本質的なところのみを簡単に説明するにとどめた。授業にあたっては、予習などを要求しないで、その代わりに授業を真剣に聞くことを要求<sup>7</sup>、各Lektion 2回目の授業での問題演習は、問題を解くヒントや辞書の調べ方なども含めて全て授業中に取り組みせる方法をとった。問題演習は宿題とはしていないので、家庭学習の取り組みにおける真面目／不真面目の優劣が無関係となり<sup>8</sup>、また理解度不振で混乱する学生を授業中の活動のなかで指導できるという利点もあった。

各定期試験はそれぞれLektion 3つ分を範囲としたが、出題法は、全て創作問題で(つまりどこかの問題をそのまま出題するとか、教科書の引用文をそのまま訳すなどは一切なし)、辞書、教科書、ノート等の、学習に使用するあらゆるものを持ち込むことを認めた。要するに、「辞書と文法書があればなんとか理解できる」ということの達成度を確保することで評価するという立場をとった。この方法の試験であれば、単語や活用表を丸暗記するという、安直であるが非常に苦痛を強いることになる作業を学生に課すことをしなくて済み、文法項目の網羅的かつ簡潔な理解を促すことにつながる。

なお、本稿提出時(2008年11月)において、2008年度の授業は後期中間試験直前であり、それ以降の

<sup>7</sup> この点はシラバスにも明記。また、第1回目のガイダンスでもこの点を強調した。

<sup>8</sup> 家庭学習の徹底はおそらくどの教科でも困難な問題とされ、特に家庭学習が不真面目で、そのせいで成績不振な学生に対しては指導が困難であるが、この授業展開により、取り組みの不真面目な受講者の落ちこぼれを多少なりとも防止できる。また、受講者に対して授業への負担がそれほど大きくないという認識を与えることにより、授業への意欲が増すことも補助的に期待している。

日本に来ている留学生は、すでに日本語を外国語として運用しており、彼らにとっては、ここでの「ドイツ語」は第3あるいは第4の外国語である。留学生を対象にカリキュラムを見直すならば、例えば、「日本語<sup>9</sup>」を第一外国語に、「英語」を第二外国語に定めるという可能性も検討すべきではないかとも思う。この発想の背景には、前述のような出身国の言語事情もあるが、さらにもう一つ、4年次から留学生も履修する、必修の「英語」が彼らにとっての外国語である日本語を使用して教授され、それが留学生にとって少なからぬ負担になっているらしいことがある。国際標準という概念は、授業内容もさることながら、留学生も含めた受講者側の立場も含めて当てはめていかなければならないだろう。

## 7. おわりに

以上、秋田高専における第二外国語教育（ドイツ語）に関して、その存在意義と重要性について、実質的に担当初年度となる2008年度の実践とともに述べた。まず前提としなければならないことは、初級文法を教授する「独語Ⅰ」がカリキュラム上必修科

<sup>9</sup> 現在の秋田高専のカリキュラム上では、留学生の編入する第3学年で予備的な授業として「日本語教育」（6単位）が開設されているが、日本人学生の外国語科目に相当するものではない。

目であることで、なぜそうなっているのか、何が重要なのかについて考えておかねばならないが、本稿でその重要性について筆者が自覚している点について論じた。ドイツ語は必修である以上、一通りの文法事項が教授される必要がある。しかし、開設科目の単位数は2単位と少ないこと、学生に要求される資質として高度な語学力は要求されないことなどから、文法事項の説明を簡略な程度に抑え、暗記や予習など、授業外の作業をなるべく強制しないですまされるよう工夫した授業展開とした。定期試験も、詰め込み式の暗記問題が、初級程度で終わる文法の知識の定着に全く役立たない点を指摘し、簡潔な知識のみによる応用力を問うものとした。筆者は、第二外国語教育の最も価値ある貢献は、第一外国語の英語理解をさらに深めることにあるとみなしており、この信念にもとづいて実践していく以上、第二外国語科目が「無駄なもの」「あってもなくてもどうでもいいもの」という位置づけにはならないですむと考えている。

## 参考文献

桑本裕二・宮本律子「双方向型異文化理解の試みとしての「日本事情」」『秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要』第27号, 87-95, (2005)